

アフガニスタン活動報告

日本国際ボランティアセンター（JVC）
アフガニスタン緊急対応担当 清水俊弘

経緯

昨年10月7日に始まった米軍によるアフガニスタン、タリバン政権への空爆は、以前から続く紛争や旱魃などにより疲弊したこの土地にさらなる被害をもたらし、多くの人々が避難生活を強いられることとなった。これに対し、空爆の反対を訴えつづけてきたJVCとして、現場での具体的支援のあり方を模索した結果、閉鎖されたパキスタン国境に近い東部ナンガルハール州に滞留する避難民及び、それによって大きな負担を強いられている地元民に対する緊急の医薬品や食糧の支援を実施してきた。まず最初の緊急支援として医薬品の購入資金5千ドル、さらに翌月、この活動を通じて把握した情報をもとに、第2次支援として、避難民、地元民約2000世帯を対象とした食糧配給の購入資金4万ドルを追加。OMARのジャララバード事務所スタッフの力を借り、ジャララバードで購入した小麦と、食用油の配給を行った。そして2003年1月、第3次支援として、清水、上住（看護婦）の2名、また短期で医師の細村をジャララバードに派遣し、その後の避難民の状況の把握と、我々が実施した支援のフォローをすることになった。具体的には、広く地域の状況を把握するため、その後カブールに戻った巡回診療スタッフを再度ジャララバードにシフトし、厳しい冬が終わる3月まで活動に直接参加し、支援の成果とさらなる課題を提起することになった。

アフガン全体及び活動地周辺の状況

3月現在、ナンガルハール州南部のトラボラ地域ではアルカイダの残党に対する米軍の攻撃がまだ散発的に行われている他、アフガン北部のタカール州、バグラ州でも地方軍閥間での争いが続き、地方ではいまだに避難民を排出している状況がある。一方首都カブールにはISAF（トルコ、フランス、イギリス、ドイツ、ロシア他）が展開しており、「復興」ブームの中、海外からのゲストを数多く迎え、さし当たっての治安の良さをアピールしている。また、国連を始め多くの国際機関が活動の拠点としているため、家賃や人件費の高騰を招き、財政基盤の弱い地元NGOとの軋轢を生み始めている。いずれにしても、現実的には6月のロヤジルガの結果誕生する政府が、地方の軍閥も含めた統治に成功するかどうか、本格的な「復興」支援を受けるためのカギを握っており、情勢によっては先の閣僚会議でブレッジされた巨額の資金も幻に終わる可能性も否めない。

冬が終わると共にパキスタンに出ていた難民の帰還も始まり、現在1日平均1500世帯がジャララバード近郊の中継視点を通過している。ナンガルハール州内の農村部に滞留している避難民家庭も情勢の安定が確認できれば順次帰り始めることだろう。こうした難民、避難民の同行と中央政府の統治能力に関して今後も注視していく必要がある。

活動の成果：

*** 巡回診療活動の再編**

昨年 12 月以降、休止状態だった東部地域での巡回診療活動の再起動に際し、効果の持続性を考慮した衛生及び栄養講習を新たに組み込んだ編成の実現に協力した。

*** 2 ヶ月で約 2 0 0 0 人を診療**

診療活動の直接の成果として約 2 0 0 0 人の患者に治癒の為の適切な指導と医薬品を提供することができた。また、衛生、栄養教育を実施し乳児を持つ約 1000 人の母親に下痢の予防や、身近な食材を使った流動食の作り方を指導することができた。(別紙報告参照)

*** 避難民キャンプにおける女性診療**

これまで女性のクリニックがなかったヒサルシャヒキャンプにおいて 2 回の診療活動を行い、延べ 6 0 0 人を越える女性と乳幼児の患者のケアができた。避難民キャンプは、感染症がまん延しやすい環境なので、早期の対処と病状の傾向把握が望ましい。近い内にこれまでの診療データをまとめ、傾向分析したものを州の難民局、WHO に報告する。

*** 毛布 8 0 0 0 枚の配布**

日本の「アフリカに毛布を送る会」から寄贈された毛布 1 万枚のうち、約 8 0 0 0 枚を西部ヘラートの避難民キャンプおよび東部ナンガルハール州の避難民キャンプ、農村部に配布し、冬の寒さを乗り切る一助となった。

*** 人間関係の構築**

これらの活動を通じて、対象地の住民や難民局などの関係諸機関と良い協力関係を築く事ができた。この関係をベースに行政システムの再編過程で市民の声を伝えるパイプ役を担っていきたい。

パートナーの強みと弱点：

- 強み：**
- 1) 12 年間様々な国際機関、国際 NGO との協力経験があり、個々のスタッフの質が高く。報告能力、経理システムなど信頼性の高い組織力を擁する。
 - 2) これまで、地雷除去活動を通じて各地方の事情に明るいこと、また地方軍閥との距離の置き方、バランスの取り方を心得ておりどの派閥とも中立な関係で対応できること。
 - 3) 特にジャララバード事務所のスタッフは、現在の活動対象地であるベースド、カマの出身者が多く、各村のマリックや長老達との関係も良好であること。
 - 4) 以前から、地雷回避教育部門に女性のトレーナーを起用するなど、ジェンダーへの配慮も比較的ある方といえる。現行のモバイルチームもアフガン人スタッフ 10 名中 5 名は女性スタッフであり、女性部門のコーディネーターのナイラは Dr. マスードと共に意思決定に深く関わっている。

弱点：

- 1) 現在、資金及び物資の調達をペシャワールにまた情報、意思決定をカプールに依存して

いる為、ジャララバードは、あらゆる物事が後回しにされがちである。

- 2) OMAR のみならずローカル NGO 全般に言える問題として、英語、事務処理能力の高いシニアレベルのスタッフが国連機関や企業に引き抜かれるケースが増えている。

JVC スタッフの役割と関わることの意義 :

1) 活動の継続と促進

日本人スタッフがいることで現場に緊張感をもたらし、活動の継続がより確かな形で保証される。また、資金や情報の流れにおいてジャララバードの事務所の機能が弱いこともあり、活動の円滑な推進のためにペシャワール、カブールへの連絡の後押しを担う。

2) 治安面での「よそ者」効果

ジャララバード市内から各農村地区に行く際に、各軍閥のチェックポイントを通過せねばならないが、その際に日本の団体からの支援だと言うことで、パスできることが多いのでこの活動をつまらない恐喝や収奪から守る為にも「一緒にいる」ことの意義は大きい。また、アフガン全体の情勢を考慮した場合にも、この国が再度混乱状態に陥らないよう、人道支援を謳う組織のプレゼンスはそれ自体強い意味を持つ。

3) 情報の整理と発信

やはり、現地で直接活動することで得られる情報は何にも代え難いものがある。業務上必要な日々の活動の報告や、広報などに役立つ周辺情報や写真、映像の記録等、現時点での活動のみならず将来に向けて関わり方を検討するための材料を一次情報として収集できることは貴重である。特に、農村部の生活の場に直接関われる、現在の活動を通して得られる情報は今後の関わり方を考えて行く上で重要な足場となっている。

今後の課題と活動 :

* アフガン全体

- 1) 地方レベルの治安維持、秩序なき武装民兵の脅威。
- 2) 政府の形成過程における「復興」援助の影響
- 3) 地方の自治勢力と軍閥、そして中央政府との関係
- 4) 水管理と農業

* JVC / OMAR の活動 今後もスタッフの派遣を続ける ;

- 1) 新規に開設したセンタークリニックの機能を巡回診療に活かす
- 2) 診療活動を通して得た疾患に関する情報を州の保健局、WHO、その他公立病院と共有するしくみを確立する。
- 3) 流動的な情勢と、季節変化による影響も含め通年で見るべき問題の把握。

派遣期間 : 1年 (2002年4月下旬~2003年3月)

人数 : 調整員 一人 (男性に限る) 看護婦 一人 (女性)

目的 : 1) 2月に立ち上がった巡回診療活動の質の維持と、巡回範囲の拡大に伴う調整 (地域や内容に偏りがないように、今しばらくモニターが必要と思われる)。

- 2) 近く開設されるセンタークリニックの機能を、主たる活動である巡回診療に有効に働くように助言する。(バランスを維持する必要がある)
- 3) 現行の巡回診療を足場に、アフガンの情勢を把握するとともに、通年で見るべき様々な事象に関してのアクションリサーチを継続する。
(疾患の変化、水管理の問題、農業生産の実状、土地問題、市民社会の形成過程等)